

太

田

南

市

集

全

昭和三年十二月十二日 印刷

有朋堂文庫
太田南畝集
(非賣品)

編輯者 塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

發行刷兼
三浦捷一

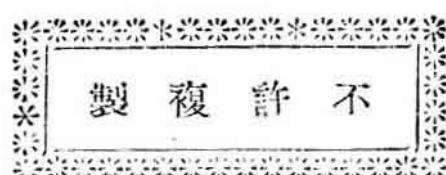
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所 有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所 有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



緒 言

太田南畝(一四〇九—一四八三)、名は覃、通稱直次郎。四方山人、四方赤良、寐惚、杏花園等の號あり、蜀山人の名最も著はる。江戸幕府の徒士の家に生れ、長じて吏職を繼ぐ。俊敏の資を以て夙に昌平黌に學び、頭角嶄然として儕輩を凌ぎ、實用の材として青雲を攀ぢんの志ありしも、當時の頽敗せる士風は、古賀精里の所謂「如何なる大人君子に對すれども毫も詔諱の氣なき」彼を容ること能はず、終に彼をして、輕文學に趨らしめたり。彼時勢に激して一たび歩を轉ずるや、當時の才子と詩酒徵逐、歌舞盃酌の間に胸中の磊塊を吐き、獨り狂歌狂文狂詩の大宗匠としてのみならず、品位ある大通人として、平民文學界の盟主として、蜀山人の名一世に高く、兒童走卒も之を

識らざるものなかりしといふ。

彼の狂歌は實に天稟に出で、所謂咳唾珠玉を成す底のもの、高く我が文學史上に獨歩せり。斯の滑稽にして洒落なる彼が、一面に於て勤勉慎密の資を具へ、能く煩瑣なる吏務を理め、欽然たる幾多の述作を敢てしたるは、彼を識る者の齊しく驚異する所たり。

彼は實に快速なる文章家、筆まめなる筆記者にして、詩文集歌集の外、筆述纂錄する所、戯作、紀行、日記、考證、隨筆、抄錄等に涉り、大凡百餘部を算せり。而して本集纂錄する所僅に其十五部に過ぎざるは、校訂者の頗る遺憾とする所なりと雖も、取捨選擇に於ては、聊か意を用ふる所あり、庶幾はくは讀者をして、一斑に全豹を窺はしむる事を得ん歟。

四方のあか(文化五年) 狂文集。

四方の留糟(文政二年) 四方のあかの續篇。

寐惚先生文集(明和四年) 狂詩狂文集。

檀那山人藝舍集(天明四年)

狂詩集。

蜀山自筆百首狂歌(文化十五年) 老後得意の狂歌百首を自撰せるもの。

めでた百首夷歌(天明三年) 壮時の歌集。

狂歌百人一首(天保十四年) 小倉百人一首のもじり。

千紅萬紫(文化十四年) 狂歌狂詩狂文の雑集。

萬紫千紅(文化十五年) 千紅萬紫の續篇。

改元紀行(寛政元年) 享和元年、東海道を旅行せし時の紀行。

假名世說(文政七年) 「世說」に倣ひて近世の逸話名言等を蒐む。

南畠菴言(文化十四年) 隨筆。古書に據れる考證多し。

俗耳鼓吹(天明八年)隨筆、歌曲、戯曲に關する記事多し。

奴師勞之(文化十五年)隨筆、狂歌に關する記事多し。

松樓私語(天明七年)姿しづより聞きて記せる吉原松葉屋の年

中行事。

右の中松樓私語は、蜀山人全集にも未だ入らざりし所、校訂者の珍藏せる、蜀翁自筆の原稿により、始めて之を公刊せるもの也。其他も一々原本に據れりと雖も、唯「改元紀行」は、原稿を獲る能はざりしを以て、已むを得ず「全集」本に據れり。其他覆刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

大正二年二月

校訂者

武笠

三

太田南畝集 目録

四方のあか	一一七八
序(宿屋飯盛)	一
上	
達摩贊	三
遊女贊	三
車どめ	四
雪見のことば	五
西行法師をとぶらふことば	六
山手閑居記	七
遊女高尾朱椀記	八
土偶人畫贊	八
鯉魚贊	九
又	九

兒戯賦	一〇
庭湖石記	一二
猫賦	一二
童のために乳の無きをなげくことば	一四
鼠をせむることば	一四
なつくさ	一五
橋庵記	一八
鉤匙橋記	一九
背面達摩贊	二〇
雪女贊	二〇
芭蕉庵桃青翁贊	二〇
から誓文	二一
疊師善兵衛衣の奉加帳募縁疎	二二
大根太木塵積樓記	二三
月見の説	二三
春日部左衛門尉へ遣す感狀	二七
詩歌兄弟對面のつらわ	二八

大根太木十五番狂歌合判詞奥書	二九
宵柏贊	二九
日くらしの日記	三〇
冬日逍遙亭詠夷歌序	三七
竹本政太夫碑	三八
木兎引贊	四〇
下	
向島賦	四一
加保茶元成春帖手鑑序	四三
早稻田太神宮法樂の文并歌	四三
法樂躍長歌七首狂歌	四四
黒づくじゑばらくのつられ	四五
桐づくしきり口上	四六
わはぎの露	四八
百番月歌合序	四九
春日詠寄七福神祝夷歌序	五〇

谷水音が新宅をことぶくことば	五一
息念佛畫贊	五二
富士山繪贊	五二
酒中花の報條	五三
月見のことば	五四
同じく誹諧文風俗文選の體にならふ	五五
巴人亭記	五六
里の春柳の五もと	五八
春色花鳥媒	五九
春日龜樓詠初芝居狂歌序	六〇
春日泉亭詠雜煮餅狂歌序	六二
栗花集序	六三
茶杓記	六四
隣家におくれることば	六四
春日唐衣橘洲初會狂歌序	六六
初雛賦	六七
初轍銘	六九

初瓜頌	七〇
初鮓傳	七一
初霜解	七二
臍穴守禪師におくることば	七三
吉田李園翁を祝することば	七三
邊越方人をいためることば	七四
百喜齋記	七五
春夜伯樂宴集序	七六
四方の留粕	七九一一三六
序(四方歌垣眞顔)	七九
上	
狂歌新玉集序	八三
狂歌千里同風序	八四
龜樓狂歌會序	八五
歲日手鑑序	八六

めでた百首夷歌序	八六
太平樂卷物序	八八
江戸花海老序	八九
仙術影畫はりこの虎の巻序	八九
飛花落葉序	九一
現金論序	九二
唐來參和戯作の序	九二
金銀開運繁籃内傳序	九三
通言無茶揃序	九四
和漢同詠衆序	九四
續百鬼夜行序	九五
百鬼夜狂集序	九五
野夫鑑序	九六
繼華集序	九七
牛天神集會序	九八
狂歌すまひ草序	九九
職人部類序	一〇〇

江都二色序	一一〇
送眞顔旅行詞	一一〇
幼戯の圖の序	一一〇
鶴衣序	一〇二
五葉松序	一〇二
馬闌亭舊友尺牘帖後序	一〇三
筆はじめ	一〇四
吉書初	一〇四
鶯笛といふ笑話の序	一〇五
山東京傳畫美人合序	一〇六
八月十五夜蘆中の月をめづる言葉	一〇七
讀阿多福面	一〇八
狂歌の反古あつめたるものとの跋	一〇八
春の遊びの記	一〇九
狂歌堂に判者をゆづること葉	一二一

下

二水樓記	一一三
角田川に三船をうかぶる記	一一四
此君盃の記	一一六
談洲樓記	一一七
里の花燈籠の記	一一八
岡目八日	一一九
狸の圖贊	一二〇
猩々贊	一二〇
織物の贊	一二一
蛙の贊	一二一
七拳圖式	一二一
新酒頌	一二三
風流狂歌盃報條	一二三
土佐の麻衣報條	一二三
壁書	一二四
三谷傳來吉原細見說	一二四
悼大飯食人祭文	一二六

ひとりごと	一一二六
五十初度賀戯文	一一二六
狂歌三體傳授跋	一一二七
長牘序	一一二八
旅日記のはしがき	一一二八
謎の言葉	一一二九
鬼念佛贊	一一三〇
十三夜十三體	一一三〇
謠武藏野	一一三一
開帳場縁記	一一三一
錢湯張札	一一三二
御祭禮番附	一一三三
請狀	一一三四
中空祓	一一三四
巴人集後序	一一三五
寐惚先生文集	一一三七一一六〇

序(風來山人)	一一三七
序(服部南郭)	一一三八
初編卷之一	

詩

風雅體	一一三九
五言古	一一四〇
七言古	一一四〇
五言律	一一四一
七言律	一一四二
五言絕句	一一四三
七言絕句	一一四四

初編卷之二

文

序	一一四八
鬼手柄序	一一四八

送桃太郎序 ·········· 一四九

無盡會稿序 ·········· 一四九

記 ·········· 一五〇

贊貧堂記 ·········· 一五〇

傳 ·········· 一五一

寐惚先生傳 ·········· 一五一

銘 ·········· 一五二

贊 ·········· 一五三

論 ·········· 一五三

水懸論 ·········· 一五三

書牘 ·········· 一五五

與長松絕交書 ·········· 一五五

附錄——病名錢神論 ·········· 一五七

跋(物茂らい) ·········· 一五九

檀那山人藝舍集 ·········· 一六一一八七

序 ·········· 一六一

序(四方山人) ·········· 一六二

卷之一

五言律 ·········· 一六三

七言律 ·········· 一六四

五言絕句 ·········· 一六八

卷之二

七言絕句 ·········· 一七一

跋(王笑之) ·········· 一八七

蜀山人自筆百首狂歌 ······· 一八九——一九八

春二十首 ·········· 一八九

夏十五首 ·········· 一九〇

秋二十首 ·········· 一九二

冬十五首 ·········· 一九三

戀十首 ·········· 一九四

めでた百首夷歌	一九九—二二八
狂歌百人一首	二二九—二三四
千紅萬紫	二三五—二七六
鬼念佛畫贊	二三七
書畫帖序	二三八
月雪花	二三九
住吉白樂天の畫贊	二四三
財源福湊序	二四八
奉加帳序	二四九
猿寺禪師七十賀詞	二五六
すり小木のことば	二五九
酒色財	二六〇
飲中八仙	二七〇

千秋井の記	二七二
後序(食山人)	二七五
萬紫千紅	二七七—三二八
序(四方歌垣)	二七七
烏亭焉馬七奏壽詞	二八四
平荷集序	二八六
蕪斜翁を悼める詞	二九一
三幅對の畫讀	二九三
巢鴨の菊	二九七
十八羅漢圖讚序	二九八
近江八景	三〇〇
鷺の記	三〇〇
東豐山十五景	三〇二
豆男畫卷序	三一二
詠五色	三一八

飲酒法令	三二二	吉原	三四六
火をいましむる詞	三二三	岩淵	三四七
達摩畫贊	三三四	興津	三四八
跋(食山人)	三三七	府中	三四九
改元紀行	三二九—四一四	鞠子	三五〇
卷之上		宇都山	三五一
金川	程ヶ谷	大井川	三五二
戸塚		金谷	三五三
藤澤		菊川	三五四
平塚	大磯	日坂	三五五
國府		鯨山観山	三五六
小田原	箱根	掛川	三五七
早雲寺		妙日寺	三五八
三島		見付	三五九
沼津	原	池田	三六〇
		濱松	三六一
		荒井	三六二
		舊海道	三六三
		白須賀	三六四
		二川	三六五
		吉田	三六六
		御油	三六七
		赤坂	三六八
		岡崎	三六九
		淨瑠璃御前の墓	三七〇
		八橋の跡	三七一
		池鯉	三七二

淨瑠璃御前の墓	三七〇	吉原	三四六
八橋の跡	三七一	岩淵	三四七
池鯉	三七二	興津	三四八
岡崎	三七三	府中	三四九
淨瑠璃御前の墓	三七四	鞠子	三五〇
八橋の跡	三七五	宇都山	三五一
池鯉	三七六	大井川	三五二
岡崎	三七七	金谷	三五三
淨瑠璃御前の墓	三七八	菊川	三五四
八橋の跡	三七九	日坂	三五五
池鯉	三七〇	鯨山観山	三五六
岡崎	三七一	掛川	三五七
淨瑠璃御前の墓	三七二	妙日寺	三五八
八橋の跡	三七三	見付	三五九
池鯉	三七四	池田	三六〇
岡崎	三七五	濱松	三六一
淨瑠璃御前の墓	三七六	荒井	三六二
八橋の跡	三七七	舊海道	三六三
池鯉	三七八	白須賀	三六四
岡崎	三七九	二川	三六五
淨瑠璃御前の墓	三七〇	吉田	三六六
八橋の跡	三七一	御油	三六七
池鯉	三七二	赤坂	三六八
岡崎	三七三	淨瑠璃御前の墓	三七四
淨瑠璃御前の墓	三七四	八橋の跡	三七五
池鯉	三七五	岡崎	三七六

鮒	三六八		
桶狹間	有松	鳴海	三六九
逢坂	三九二		
大津	三八九		
三井寺	三九〇		
清水寺	三九五		

卷之下

宮(熱田)	桑名	三七一		
四日市	三七二			
石藥師	三七四			
龜山	三七五			
能古茶屋	關	三七六		
關の地藏	三七八			
鈴鹿山	坂の下	三七九		
土山	三八〇			
水口	三八二			
石部	三八三			
目川	三八五			
草津	三八六			
熱田	膳所	栗津	義仲寺	三八七

假名世說

序(山崎美成) 四一五—四九四

附錄 四〇二

淀川 四〇〇

瑞光寺 三九九

東福寺 通天橋 三九八

清水寺 三九五

逢坂 三九二

大津 三八九

三井寺 三九〇

俗男の道號(排調)	四一九
祇園與一の狂詩(排調)	四一九
農夫の書置(傷逝)	四二〇

上

原武太夫（巧藝）	四二〇
近松門左衛門（言語）	四二〇
近松の法名（補）	四二三
久米園二郎の詩（排調）	四二三
山岡明阿彌（文學）	四二三
自墮落先生（排調補）	四二三
英一蝶（巧藝補）	四二三
大屋裏住（賞譽）	四二四
長兵衛（德行補）	四二五
古近江（巧藝補）	四二六
契沖の歌（文學補）	四二七
風來山人の語（言語）	四二八
風來山人の語（言語）	四二八
松花堂の繪の墨（巧藝補）	四二八
十寸見蘭州の僕（紕漏補）	四二九
小松百龜（德行補）	四二九
秩父の水潛（巧藝）	四二九

超波（排調補）	四三〇
世にいやなるもの（言語）	四三一
鳥羽三右衛門 方正補	四三一
千瓢を千狐と記せし事（輕詫補）	四三二
鈴木某の妻（賢媛補）	四三二
賤者の言（賞譽補）	四三二
江戸の名物（言語）	四三四
九條玖山公（文學補）	四三四
脇差を研ぐ季節（任誕補）	四三四
雅人俗を弄ぶ（雅量補）	四三五
彌勒といふ年號（言語）	四三五
同（言語補）	四三五
吉原の編笠茶屋（言語補）	四三六
荻生徂徠（德行補）	四三六
江口の君の烟草入（言語補）	四三七
古賢の樂（言語）	四三七
荻生惣右衛門が和語（言語補）	四三八